

わたしの「海」

イラストレーター

柳原 良平

海洋ジャーナリスト

小林 則子

建築家

黒川 紀章

司会者・エッセイスト

楠田 枝里子

作家

C・W・ニコル

ダイバー

須賀 潮美

しんかい2000船長

井田 正比古

プロサーファー

土佐 洋子

海に囲まれている国なのに、ほとんどの日本人は海水浴くらいしか海に接する機会がない。

おりしも今年は、大型客船が久しぶりに次々と誕生する兆しが見えてきた。近年、世界のクルーズ客船が今までの

寄港地への船遊を楽しむ傾向から、船の中で洋上生活を楽しむ傾向



洋上生活を楽しむ時代へ

に変わってきている。太平洋が広すぎて寄港地選別に苦しんでいた日本の客船も、これからは広い洋上で船そのものを楽しむ時代になるから、もってこいである。

また、揺れない船型、揺れない船室などの研究が進んできている。波打ち際の海水浴だけでなく、洋上に停泊して大海原の海水浴もできる。海を楽しむ船が将来の客船の姿になるだろう。

女性だけのヨット「リブ号」で十年かけて挑戦してきた歴史的な海上ルートをたどる日本周航航海も、ひと区切りをつけた。今年は、海と生活文化を探りながら日本列島と周辺諸国を巡る航海シリーズをスタートさせます。

私たちの活動も、根本は海洋レクリエーションに対する社会的な



市民に開放された『海』

理解が深まってほしいという願いから出発しています。しかし、現実にはヨットハーバー料金が法外で、マリンスポーツが過熱し、投資の対象にされつつあります。車を買って乗るように、だれでもヨットで遊ぶ、アフタファイブにはセーリングが楽しめる。こんな市民に開放された海にしてほしい。行政側も経済振興のための海洋レジャー開発という発想を切り替えてほしい。

さらに、海上空港都市を数カ所建設することにより短距離間航空輸送も可能になり、環太平洋経済圏の発展と平和交流が約束されるだろう。

地中海時代から現代の環太平洋時代へと続く歴史の流れを見ると、沿岸地域を結ぶ経済、情報、人の交流が行われることで発展してきた。しかし、環太平洋圏全体を結ぶ交通、情報ルートは、まだ確立されていない。

シルクロードの昔から、日本と韓国、中国との物資交流は船に頼



海底トンネルをリニアで

らなければならなかった。今後は、海底トンネルで日本・韓国・中国を結び、リニアモーターカーによる高速大量輸送システムを利用する高速海底トンネル構想が二十一世紀の重要な政策として大きくクローズアップされてくるだろう。

さらに、海上空港都市を数カ所建設することにより短距離間航空輸送も可能になり、環太平洋経済圏の発展と平和交流が約束されるだろう。

海は人類にとって、またまた未知の世界。将来は、広大な海や海底をもっと利用することになるでしょう。

例えば、海中、海底を舞台にした大規模な遊園地。大ウミガメの背中に乗って遊園地に入ると、観覧車が高くそびえ、海面から海底まで、日差しの強さによって刻々と変わる海の



大ウミガメの背で海中散歩

色。海の深さによって魚群の種類も千差万別。クジラ語を翻訳できるレシーバーをつければ、ナレーターのアナウンスが大海原の歴史や地理を教えてくれます。少し疲れたら、熱水鉱床の温泉につかって深海魚の電気トリック・パレード見物もおすすめです。

海は私たち生物の源。その海に抱かれて心ゆくまで遊んでみれば、どんな疲れもすっかり消えてしまふでしょう。

私がこの国にはじめてやって来たのは二十六年。当時、東京に暮らしていた私にとって心の落ち着く場所は、この国の信じられないほど変化に富んだ海岸や海だった。

小さな漁村のたたずまい、名前さえ聞いたこともない魚がおびただしく並び、さわめいた早朝の魚市場、躍動的な漁の歌。



4半世紀前の日本の海よ

それらの海の幸ときたら、まさに天上の食物とさえ思われた。ああ、本当に何と豊かだったことだろう。

それがどうだ。この四半世紀のあいだに信じられないほど多くの海の幸が姿を消していった。破壊は今も続いている。海岸線は六〇％以上がコンクリートで埋め立てられた。時計の針を二十五年前の、海がまだあんなに美しかったころに戻してもらいたい。

仕事で日本中の海を潜ってきた。日本海は鉛色のイメジですが、海草はもえぎ色に輝いています。ヘドロの海の東京湾にもいるような魚が、頑張って住んでいます。

潜っていると魚が何を考えているか、わかるようになっってきました。好奇心で寄ってくる魚、我関せずの魚、人間を恐れて



魚の目で見た世界を伝達

いる魚。人間が荒らしている海の魚はすぐ逃げます。そういう所は、陸地もそうです。海への夢といえは「ドリトル先生 航海記」のように、魚といふ話ができはいいですね。

「この海が荒れてきている。助けてほしい」「こんな事件があった」といった。魚の目で見えた世界を「お魚ニユーステーション」として伝えていきたいですね。

これは最新鋭の潜水調査船「しんかい6500」が完結するので、太平洋の真ん中のだれも潜ったことのないようなところへ行きたい。さて宙返り一回転ができるそうに、二十一世紀に「しんかい10000」ができれば、世界一深い海、マリアナ海溝にも挑戦してみたい。

しかし、深海底探索は真っ暗な夜道をライ



マイナス1万に挑戦、

トをつけて走っているようなもので、海底の全体像は見えない。超音波測定装置を使い、どこに山があり谷があるか、を組み立てているのだ。

こんな海底は、はいずり回っていたら逆目で海底を見えなくなる。いっそのこと、地球上にある海水を全部とり除くことができた、海底は一目りよう然だ。

日本の海は波が小さいのでウェーブという波乗りの競技はほとんどできません。ハワイのマウイ島では大波に乗って宙返り一回転ができるそうです。

だから、夢といえは、人工的に大波が起せるようなサーフランドを湘南沖合あたりに建設し、ウインドサーフィンの



湘南でハワイのウェーブ

各種目ができるようにしたいですね。それに、次世代のウインドサーフィンとして、飛び魚のように空飛ぶボードが開発できればいいですね。米オレゴン州のグーフィーという大きな川では風が強く、セーリングができます。この羽を改良して滞空時間を競うようなレースもやってみたいなあ。

こんなことを夢想しながら、また深海に挑戦しよう。